

# 「数理科学」は語る

30年前から現代へのメッセージ

一松 信

1985年6月号

本誌「数理科学」は必ずしも「数学」に限定せず、時にはかなりかけ離れた話題を扱ったことがある。今回取り上げた特集「記号」もかなり異質な一例と思う。企画者でなく単なる一執筆者にすぎない私が回想談を書くのは僭越だが、私なりの感想を記したい。

私の記事も標題とは裏腹に、記号に対する素朴な感覚が必ずしも世界共通でないことや、漢字コードなどが中心の記述である。前者に関連して執筆時点以後に知った一つの話を書き添えておきたい。

我々は赤色を暖・熱、青色を寒・冷と思って怪しくない。世界の多くの国でもそのようだが、アフリカのある民族はこれが逆だという。昼間の青空は暑熱を感じさせる；反対に赤い夕焼けは冷涼を連想するという理由で、現地の人々の感覚からは合理的である。そう聞いて異文化相互理解が予想外に困難な課題だと改めて痛感した。

ワープロのかな（ローマ字）漢字変換も随分進歩したが、それでも時折面白い(?)変換ミスに出会う。最近の例では誇大[古代]史、次官感覚[時間間隔]、掃除[相似]形、佐賀下[探した]などがあつた。しかし私が期待した(?)この種の「文字遊び」はあまり流行しなかったようである。

漢字コードの問題も一応の標準ができたようである。現在ではむしろ中国の簡体字の略し方に一貫性が乏しかった点に批判が集中しているように感じる。

数学は多くの記号を使う。しかしそれも時代とともに変化しているし、また必ずしも国際標準規格が全世界で普遍的に使われているとも限らない。結局は印刷の都合もあるが、多くの論文を書いた者が勝ちかもしれない。

そして「記号」は数学だけの課題ではない。現在同様の企画が可能か、それをあえて行ったら30年前とどのような差が生じるか、率直に私には考え難い。

ただの絵文字のような記号をもっと活用して、後世



の人々の参考にしたという気持ちが残る。半世紀前にヴェントリスがクレタの線文字Bを「ロゼッタ石なしに」解読に成功したのは快挙だが、ある意味で「ロゼッタ石」があつた；それは粘土板の隅に書かれていた絵（馬、杯など）だったという話は暗示的である。

この特集の拙稿のむすびに少々おこがましいが、「記号論は社会における価値観の変化を論じているような気がする」と記した。この特集の各記事は現在でも価値を失っていないと思うが、現在の観点から読み直してみると、30年の歳月の間に大きく変化した部分と変化に乏しい部分が明白に感じられる。その具体例は略すが、そういう眼で読み直すといっそう興味があつた。

(ひとつまつ・しん、京都大学名誉教授)